

茶山と梅

茶山は「梅好き」と言われ、多くの詩を残している。茶山と梅の関係を考えてみたい。
一、菅波家の家紋が梅鉢である。

尾道屋初代は、畠山五郎右衛門道元で、その子庄左衛門道俊は福島氏に仕えるが、福島氏が改易され浪人となる。その子源左衛門道治は浪士をやめて民夫となり、武器を売って酒造を営む。時に島原の乱がおきる。酒を積んで陣中に赴く。海上風差し障りなく酒の高利を得る。これは菅公の恩徳であると、姓を菅の一字を上置き、海上の夢の知らせにて、波の一字を下につけてこの家の末世のせいとなし・・(攻略)

として、家紋も「梅はち紋」とした。

道治の弟久次郎包好も、分家し(初代本庄屋) 畠山から菅波に改姓する。

本庄屋菅波家は酒造業を営みながら庄屋として活躍する。

さらに帰谷に天満宮を造営している。(棟札に久次郎の名がある)

本庄屋から分家した茶山の家紋も「梅はち紋」である。

二 初めて会った拙齋と出かけたのが梅園である。

明和八年(一七七二) 茶山二四歳の時、茶山を訪ねきた西山拙齋と

三原に観梅に行っている。

この時初めて二人は出会うのであるが、なぜか三原の西野梅林を訪ねている。

当時、梅は文人たちにとっては重要なものであり、多くの文人たちが梅の句を詠んでいる。寒い冬にもかかわらず、力よく独特な香りを放つ梅に心を奪われたのであろうか。

茶山は梅を求めて近隣に足を運んでいる。近隣で有名であったのが、西野梅林(三原) 大林寺(加茂町栗根) 栄谷(福山郷分) 丁谷であったという。今はその面影はなかったり、衰退しているという。文化十年(一八二二)には『三原梅見之記』がある。

また、文化十二年(一八一五) 藩主阿部正精の命で江戸出府した際、元老中で白河藩前藩主松平定信に招かれた「浴恩園」で、定信から枝の手折り一梅をもらったという話は有名である。

三 茶山は多くの梅を題した詩を詠んでいる

茶山は生涯を通して梅にまつわる詩を多く詠んでいる。黄葉夕陽村舎詩には数首まとめて記載してある場合もあるし、出かけた際に詠んだ詩もある。いくつか紹介する。

(一) 『黄葉夕陽村舎詩 前篇前卷一―一六』に梅花七首がある。卷一は「天明壬寅」(天明二年以前)の作なので、茶山の若い時代のものであろう。それが次の七首である。

梅花七首 黄葉夕陽村舎詩 前卷一―一六

- 見説龍泉寺畔梅 今朝始靚一枝開 屐痕斜印幽蹊雪 知有吟朋先我來
- 隣翁知我愛梅心 携贈温香一朵深 人報今朝風雪裡 見君欵笠走南林
- 何處狂香僕鼻來 春風一縷懶橋隈 行人指點叢松樹 中有孤村半種梅
- 自愛孤根抱暗香 寧隨百卉競時粧 多年惡雨狂風裏 獨立寒雲冷石傍
- 人道山村梅已飄 直衝泥路不辭遙 奈何昨夜三更雨 漂去前溪獨木橋
- 昨夜高樓一笛風 梅花零落水西東 歎推未定詩家恨 九十春光半已空
- 玉笛空吹塞上悲 音書漫寄隴頭思 幸吾歲歲在鄉園 賞遍開時將落時



帰り谷天満宮

北川勇先生は『茶山詩話』の中でこの七首のうち次の二首を紹介している

梅花七首の一

見説龍泉寺畔梅 見るならく 龍泉寺畔の梅
今朝始観一枝開 今朝始めて一枝の開くを観(み)る
屐痕斜印幽蹊雪 屐痕(げきこん)斜めに印す 幽蹊(ゆうけい)の雪
知有吟朋先我來 知んぬ 吟朋(ぎんぼう) 我に先んじて來たる有るを

見説 「見るならく」と読む。 畔 ひとり。 屐痕 屐は下駄の事で、二の字に下駄の跡がついて いたようす。 知 「知んぬ」と読む。 吟朋 詩を吟じ詩を口ずさむ友。

(大意) 龍泉寺の境内に梅がやつと咲いたらしい。誰よりも早く見てやろうと狙っていた。雪の降っていた早朝、龍泉寺に行ってみると、下駄の二の字、二の字の足跡が続いている。文人仲間誰かに先に見初めをやられた。

梅花七首の五

人道山村梅已飄 人 道(い)う 山村 梅 已に飄(ひるがえ)ると
直衝泥路不辭遙 直ちに 泥路(でいろ)を衝(つ)いて 遙(はる)かなるを辞せず
奈何昨夜三更雨 奈何(いかん)せん 昨夜 三更の雨
漂去前溪獨木橋 漂(ただよ)い去る 前溪(ぜんけい)独木橋

道 言う。 飄 風にひらひら舞う。 奈何 (困って)どうしよう 獨木橋 丸木橋

三更 日暮れから朝までを五等分した更点時刻法で、午後十一時から午前二時まで

(大意) 誰かが言うには山の中の村では、もう梅の花がひらひらと舞っているようだ。急いで泥んこ道について、遠くても物ともせず出かけてきた。さて、どうしよう。昨夜の夜半の雨で大水が出て、前の谷は丸木橋が流れてしまっている。(残念だなあ・・・)

(二) 『黄葉夕陽村舎詩 後編卷二―十九』でも「梅」と題して十二首を詠んでいる。北川先生は『茶山詩話』の中で次の四首を紹介している

梅 十二首の二

暗裡尋香折一枝 暗裡(あんり) 香を尋ねて 一枝を折る
林頭路滑雪消時 林頭 路(みち) 滑らかにして 雪消ゆる時
人間何處無娛樂 人間(じんかん) 何(いずれ)の処(ところ)にか娛樂なからん
恐使花神笑許痴 恐らくは 花神をして 許(こ)の痴を 笑わ使めん

暗裡 暗闇。 頭 ひとり、林頭で林のあたり。 人間 じんかんと読む 世間 娛樂 楽しみ。 許 このことという意味、これほどの。 痴 西も東も判断がつかないこと。

(大意) 暗闇の中、梅の香りを頼りに探し当て一枝を折る。林の入り口当たりでは雪が消えぬかんでいる。世間ではどこにでも楽しいことがないということがあろうか。恐らくは梅の神様をして私の馬鹿さかげんを笑っておられるだろう。

梅 十二首の五

遍観偏好臨流影 遍(せま)り観て 偏(ひとえ)に好し 流に臨む影
遥望逾佳倚竹姿 遙かに望んで 逾(いよ)いよ佳(か)なり 竹に倚(よ)る姿
一歳會心何日是 一歳の會心 何れの日にか 是なる
野航微雪訪君時 野航(やこう)の微雪。君を訪う時

遍 そばによっていく 迫る。 偏 ひたすら。 倚 よりかかる 一歳 一年中
會心 最も心にかなう

(大意) 梅を観るのに梅の木のそばまで寄って行くと、その姿が下を流れる水鏡に映っている。遙かかなたの竹やぶのほりにも梅が咲いていいなあ。一年のうち最も心にかなう日は、いずれの時であろうか。雪がほつりほつりと降る中を小川に沿って野を巡って、君(梅)に会いに行くのもまんざら捨てたものではないな。

梅 十二首の八

偶逢遊女後先還 偶(たまたま)遊女に逢うて 後先(こうせん)して還る
素袂青裙玉作顔 素袂(そへい)青裙(せいくん) 玉を顔と作(な)す
行入梅花忽相失 行く行く梅花に入りて 忽(たちま)ち相失(そうしつ)す
賸香横路月彎彎 賸香(ようか) 路に横たわって 月弯弯(わんわん)たり

遊女 野山の景色を愛でて遊び歩く女性。 後先 後になつたり先になつたりするさま。
素袂 模様のない白い袂(たもと)。 裙 も、スカート。 玉作顔 玉のお湯に美しい顔。
相失 見失う。 賸 余る、こぼれる。 彎 弓を引き絞つ たさま。

(大意) たまたま野山の景色を尋ねているで見たくとも合い女達に逢つた。白いたもとの着物で青いスカートでまことにこの世で見たくもない美しいその女たちと後、後にり先になつてきたようだが、どこのお方じやろうと思つていたら、どんどん行つとる間に梅の花の中に消えてしまった。後には梅の香りがひときわ路いっばいに広がり立ち込めている。ふと見上げると、弓を弾き絞つたような月が出ていた。

○この詩はメルヘンの世界に誘つてくれているよう。「素袂青裙玉作顔」は、梅の花の精であつたのかも。梅の花の中にスーッと消えて、香りだけが残っている。茶山詩の見事さでもあろう。

梅 十二首の九

四野梅開二月天 四野(しや)梅開く 二月の天
吾筇日被暗香牽 吾が筇(つえ)は 日々 暗香に牽(ひ)かる
客來若問吟遊處 客來たつて 若し吟遊の処を問わば
多在村橋石澗邊 多くは 村橋石澗(かん)の辺に在り

四野 東西南北、あちこちで 筇 つえ 日 日とあるが原文では日を重ねてある
牽 牛の鼻に鼻ぐりをつけて引つ張るという意味、梅の香りに引つ張られるという意。

(大意) あちこちで梅が咲き誇る二月の季節。わが杖は毎日漂つてくる香りに引つ張られていく。もし客が来て行き先を聞いたなら、次のように答えなさい。多分村の谷川の橋のあたりにいらつしやるだろうと。

(三) 西福寺には度々詩会を催している

西福寺賞梅	西福寺賞梅	黄葉夕陽村舎詩	後編 卷六一
品茶琢句坐斜陽	茶を品(ひん)し 句を琢(たく)して斜陽に座(ざ)し		
閑事偏知春日長	閑事(かんじ) 偏(ひと)えに春日(しゅんじつ)の長(なが)きを知る		
暮鳥還棲驚有客	暮鳥(ぼちょう) 棲(すみか)に還(かえ)り客(きやく)有るに驚く		
梅花花底小僧房	梅花(ばいか) 花底(かてい)小僧房		

賞梅 梅を愛して楽しむ。 品茶 お茶の品定めをする。 琢 玉をみがくこと。
棲 すみか、ねぐら。 僧房 僧侶の住む建物。

(大意) 茶を楽しむ詩をひねり、夕陽がさすまで座っている。閑暇(かんか)を呑気に過ごすものには、まったく春の日は長い。小鳥がねぐらに帰ってきて、客(茶山)がいるのに驚いたらしい。梅の花盛りにつまれた僧房の一日に満足した。



西福寺院中詩会の図



本堂前の詩碑

(四) 『黄葉夕陽村舎詩』にみられる主な「梅」の詩

詩題	巻	丁
送梅	前編	一
偶成	後編	三
梅林即事	後編	四
丁谷尋梅	後編	七
栄谷看梅	後編	八
韓聊玉示遊月瀬	後編	八
早春雜詩	遺稿	二
插梅三絶	遺稿	三
瓶插紅白野梅	遺稿	七
即時	遺稿	七

参考文献

- 『黄葉夕陽村舎詩』復刻版 児島書店
- 『菅茶山』上下 富士川秀郎
- 『茶山詩話』 北川 勇
- 『菅茶山と廉塾』 神辺塾文化研究会